

歴史地図・慣習地図・ メンタルマップ 利用者から見た情報サービス

服部 美奈 名古屋大学大学院教育発達科学研究科



私の専門が教育学と地域研究ですので、その観点からフェブリンさんと西さんの発表に対してコメントしたいと思います。

1990年代に私がはじめて西スマトラのフィールドに行ったときには、まだ地図がデジタル化されておらず、統計局や教育省に行ってもほとんど地図がない状態でたいへん困りました。今回フェブリンさんの発表をお聞きすると、地図も統合されたものが出てきて、問題が軽減されていることがわかりました。

■ 海外からもアクセスしやすく 利用しやすいサイトの構築を

コメントの一つめは、インドネシアのインターネット事情に対する要望です。まず、インドネシアのウェブサイトに入るとダウンロードにとっても時間がかかります。1つのデータを取得するのに30分かかった

り、ときには途中でフリーズしてしまってなかなか求める情報に到達できなかったりするという現状があります。カテゴリを区切ったり、情報を軽くしたりしていただければ、外国人にとってもアクセスしやすいウェブサイトになるのではないかと思います。

それからインドネシアでは、ほとんどの人がfacebookに入っているのではないかと思います。facebookが盛んです。そのためウェブサイトがfacebookのなかにある場合がしばしばあります。そうすると、facebookを利用しない私たちにはかなりバリアが高いというか、facebookに入らないとそのウェブサイトに入れないということが起こります。facebookに馴染みのない人のために、できればサイトをfacebookと分けて立ちあげてもらえたらと思います。

—— シンポジウム／ワークショップに参加して

国際連携と災害前のネットワークの重要性

服部 美奈

2011年は日本が東日本大震災を経験した忘れ難い年だった。3月11日に津波によって町が押し流されてゆく映像をみたとき、2004年12月26日に発生したインド洋スマトラ沖大震災の津波によって町が流されてゆくスマトラ島アチェ州の映像と重なった。日本では今、必死に復興が進められているが、これほど大規模な災害からの復興がいかに複雑で困難なものであるかを実感せずにはいられない。その意味で今回のアチェ訪問とそこでの国際ワークショップは、アチェとともに日本の復興を考える上でも大変有意義だった。

アチェの町には現在も津波の痛々しい記憶がいたるところに見られたが、津波という出来事を契機に、その目

はすでに世界に向けられていた。災害復興に向けての取り組みはこの7年のうちに着実に進められ、それがグローバルな規模で行われていることが非常に興味深かった。なかでも、震災復興に果たす高等教育機関の役割、シアクラ大学の国際ネットワーク作りと人材育成のあり方は印象的であった。アチェでは、従来からこの地域がそうであったように世界との交流を活性化させ、特に災害復興分野で世界一の成果を上げることが目標に世界のさまざまな機関との連携を強化していた。

シアクラ大学に設立された津波防災研究センター(TDMRC)と2011年秋に開講に至った大学院修士課程の災害研究プログラム(Program Studi Magister

■ 行政的な地図に加えて 慣習で描かれる地図があれば理想的

二つめは、文化的な側面の地図についてです。アチェもそうだと思いますが、西スマトラはアダット（慣習）が強い地域です。行政的な地図とアダットによる地図はかなり異なると思います。特に歴史的に見た場合、その違いは顕著だと思いますので、行政的な地図とともにアダットによって描かれる地図がウェブに掲載されると理想的だと思います。また、インドネシアはオランダの植民地支配と日本軍の占領期を経験しています。そのような時代ごとの地図も、歴史家の協力をもとにつくっていただけたらよいと思います。

■ メンタル・マップを用いて 自ら危険性を検証し、防災に役立てる

三つめに、これはお二人に対するコメントではありませんが、メンタル・マップについてお話しします。これは実際の客観的なデータに基づくデータベースとは異なる視点から作成される地図です。私たちは危機に陥ったとき、現実的にはとっさに地図を見る時間はありません。それでは何に依拠して行動するかというと、頭の中に自分が描く地図、つまりメンタル・マップに大きく影響を受けて行動することになります。

その際に、小学生と大人、さらにお年寄りとは、見えている風景がまったく違ってきます。具体的には、自分の身長2メートル上にある石などは、子どもには見えていません。それぞれの人が何を危険だと思っていて、何が見えていて何が見えていないかをメンタル・マップを用いて自らが検証し、それを共有することで防災に役立てることができればよいのではないかと思います。

その際に、小学生と大人、さらにお年寄りとは、見えている風景がまったく違ってきます。具体的には、自分の身長2メートル上にある石などは、子どもには見えていません。それぞれの人が何を危険だと思っていて、何が見えていて何が見えていないかをメンタル・マップを用いて自らが検証し、それを共有することで防災に役立てることができればよいのではないかと思います。

Kebencanaan)は、その結節点の役割を負っていた。大学院では現在、国内外の大学との共同学位プログラム(トゥイニングプログラム)の開発や、海外の災害対策関係諸機関・諸大学との連携が強化されており、ツナミ・災害研究の世界的拠点として同地域を積極的に位置づけようとしている。災害や防災に関する調査研究あるいは人的ネットワークは、一国を越えて世界規模での連携を生み出している。同時にアチェ・ツナミ博物館(Museum Tsunami Aceh)は、ツナミで被災した犠牲者を鎮魂する目的のほか、災害時の安全と防災に関する次世代のための教育研究センターとしても機能している。このように若い人材を育成するシステムが着実に整備されつつある。

またアチェの後に訪問した西スマトラでは、インド洋スマトラ沖大震災後の2005年、20代の若い世代によって設立されたKOGAMIというNGOを訪れた。KOGAMIは主に、州や県・市が実施する防災訓練のコーディネーターや、災害に遭いやすい海岸地域の学校を中心に防災教育を行っている。インタビューのなかで印象的だったのは、防災教育を通して災害前に築いた人間関係が実際の災害時に非常に有効となるという話だった。特に学校

の場合、その土地に馴染みのない人が災害後にメンタルケアで入っても、最初は子どもたちになかなか受け入れられないという。一方、災害前から学校や地域に入り、その土地に馴染みがあれば、災害後の支援がスムーズに進むとのことであった。同時に、事前にその地域の様子がわかっていて、災害発生後、どの地域にどのようなニーズがあるかを迅速に知ることができ、またその情報をこれから支援に入る人たちに提供できるという。この話を聴き、災害前の活動が災害後の復興のために非常に重要であることが改めて理解された。

最後に、ワークショップでのアチェの皆さんの積極的な議論には感銘を受けた。このような開かれた議論が日常的にできるという事実は、この地域が海外に対して、そしてアチェ地域内でも開放的であることを物語っている。その意味で、この地域が今後、防災分野で世界の拠点としての役割を担うであろうことを予感させた。また、今回のワークショップと日本の震災を受けて、支援する支援されるという一方的な関係ではなく、同じ時代を同じ脆弱性のなかで生き、同じ運命を共有する人間としてのつながりを改めて実感できたことは大変意義深かった。